

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2942 号	氏名	田中 征治
審査担当者	主査	長瀬 浩	(印)
	副主査	深井 圭	(印)
	副主査	溝口 充志	(印)
主論文題目： Serologic response after vaccination against influenza (A/H1N1)pdm09 in children with renal disease receiving oral immunosuppressive drugs (免疫抑制薬を内服中の小児腎疾患における A/H1N1 インフルエンザワクチンの免疫原性)			

審査結果の要旨（意見）

2009年、約41年ぶりに発生した新型インフルエンザ A(H1N1)pdm09 は世界中で大流行した。本論文はあらかじめ流行予想をもとに作成されたワクチンではなく、流行時のウイルスである A(H1N1)pdm09 を用いて作成されたインフルエンザワクチンを用い、過去の感染の影響を受けない状態でワクチンの効果を検討した貴重な報告であり、これまではワクチンの効果が低下すると予想されていたステロイドと免疫抑制剤を内服中の小児腎疾患患児においても健常者と遜色のないワクチン接種後の免疫応答が得られることを示唆した論文である。免疫低下者に対するインフルエンザワクチンの効果について新しい知見を含んでおり、学位論文として高く評価できる。

論文要旨

ステロイド薬と免疫抑制薬内服中の小児腎疾患患児におけるインフルエンザ A(H1N1)pdm09 ワクチンの抗体価と副反応を前方視的に検討した。インフルエンザ A(H1N1)pdm09 株は既存のインフルエンザワクチンには含有されておらず、かつ2009年は A(H1N1)pdm09 単独接種であった。方法は①腎疾患がありステロイド薬と免疫抑制薬を内服中である内服群、②その他の疾患でそれらの薬剤を服用していない非内服群を対象にインフルエンザ A(H1N1)pdm09 ワクチンを接種して接種直前、4週間後、6か月後の赤血球凝集抑制抗体価の推移を比較した。対象は2009/10シーズンにインフルエンザ A(H1N1)pdm09 ワクチン接種を行った1歳から18歳の小児35名、このうち内服群は13名であった。結果は内服群、非内服群ともに EMEA の基準を満たし有用であると判断した。多変量解析では GMT、SCR、SPR と年齢が有意に関連を示したが、免疫抑制薬内服の有無は有効性に関連がなかった。ワクチン接種後に重篤な副反応は認めなかった。ステロイド薬や免疫抑制薬内服中でもインフルエンザ A(H1N1)pdm09 ワクチンは有効であり安全である。